

鬼瓦の分布からみた平城宮の造営

—第一次大極殿院の復原研究20—

1 はじめに

第一次大極殿院の創建期に使用された鬼瓦は、鬼（獣）の全身を表現した平城宮式鬼瓦（以下、鬼瓦と称す）I式Aである¹⁾。第一次大極殿院地区からは他に、少数ではあるが鬼瓦IV式AとBも出土している。しかし、これらは出土分布などから平城還都後の第二次大極殿院・東区朝堂院所用と指摘され、第一次大極殿院所用鬼瓦である可能性は低い。

鬼瓦I式Aは宮内の広い範囲で出土し、平城宮全体の造営に使用されたとされる。また、一部の資料に鬼の身体を横断する大きな範傷のある資料が存在することが指摘されており、この範傷の有無により製作タイミングの前後を考えることができる。

鬼瓦I式Aにみられる範傷をさらに詳細に検討することで、東西楼の造営時期と平城宮内の第一次大極殿院以外の地区の造営時期を比較し、東西楼の所用鬼瓦の型式をあきらかにしたい。

2 鬼瓦I式Aの範傷進行

第一次大極殿院出土資料では、西楼（第337次調査区）柱抜取穴から出土した鬼瓦片に、鬼文左足側の卷毛の外と外縁をむすぶような2つの小さな範傷が認められた。この範傷は、前述の鬼文を横断する大きな範傷がある資料にも確認される。

この小さい範傷は、西楼西側の第360次調査区出土資料との比較から、下から二つ目の卷毛と外縁を結ぶ幅約10mm程度の幅の広い傷が先に生じ、次にその下に細く短い傷が生じることがわかった²⁾。しかし、どちらの資料も鬼文を横断する範傷の部位が失われており、この範傷との前後関係をあきらかにできなかった。

ところが2014年の奈良県中山瓦窯の発掘調査³⁾で瓦窯SY340から西楼資料と同じ小さな範傷があるほぼ完形の資料が2点出土し、これらには鬼面を横断する範傷がなかったことで範傷の前後関係が判明した。無傷の段階を含めると0～3の4段階の範傷進行が確認できた⁴⁾。

さらに、その後の検討で前述の2つの範傷がある西楼

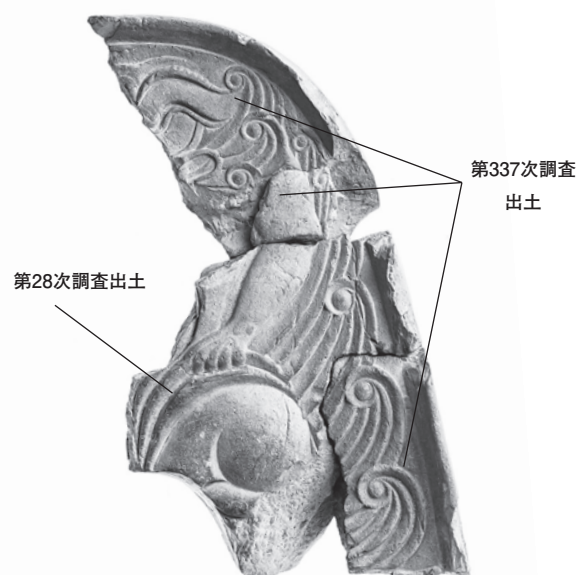


図1 鬼瓦I式Aの接合状態

出土資料と西面回廊西側（第28次調査区）出土資料が接合することがわかり、これらの資料が、中山瓦窯出土資料と同じ範傷段階と判明した（図1）。

鬼瓦I式Aの範傷内容は表1、各範傷段階の鬼瓦I式Aの平城宮内出土分布は図2⁵⁾にまとめた。出土資料の大半は破片で範傷段階を確定できない資料も多く、段階が不明な資料は図2には提示していない。

0段階の資料は第一次大極殿院東面回廊東側の北半と東区の壬生門周辺に、1・2段階の資料は第一次大極殿院南面や壬生門周辺、小門周辺から出土している。平城宮造営の初期段階のものといえるだろう。3段階の資料は比較的多数認められ⁶⁾、宮内に広く分布している。第一次大極殿院地区に限ってみれば、3段階の資料は出土しておらず、3段階の鬼瓦が生産される以前に東西楼の造営までが完了していたとも考えられる。

また、前述の接合した鬼瓦（範傷2段階）の所用建物は不明だが、第360次調査でも範傷1段階の鬼瓦が出土していることもあり、西楼などの南面付近で範傷1～2段階の鬼瓦が使用された可能性が高い。

3 軒瓦の宮内分布との比較

第一次大極殿院創建期の主要軒瓦は軒丸瓦6284Cと軒平瓦6664Cの組み合わせと考えられる。これに補足的に軒丸瓦6284Aや軒平瓦6668Aなど平城宮式瓦編年⁷⁾（以下、瓦編年と称す）I-1期の瓦が使用される。一方、東西楼所用軒瓦は軒丸瓦6304Cと軒平瓦6664K（瓦編年I-2期）の組み合わせである。これらの軒瓦の平城宮内の分布状況は図3に示した。1～3が軒丸瓦、4～6が軒平瓦の分布である。

第一次大極殿院創建軒瓦は中央区朝堂院や壬生門周辺

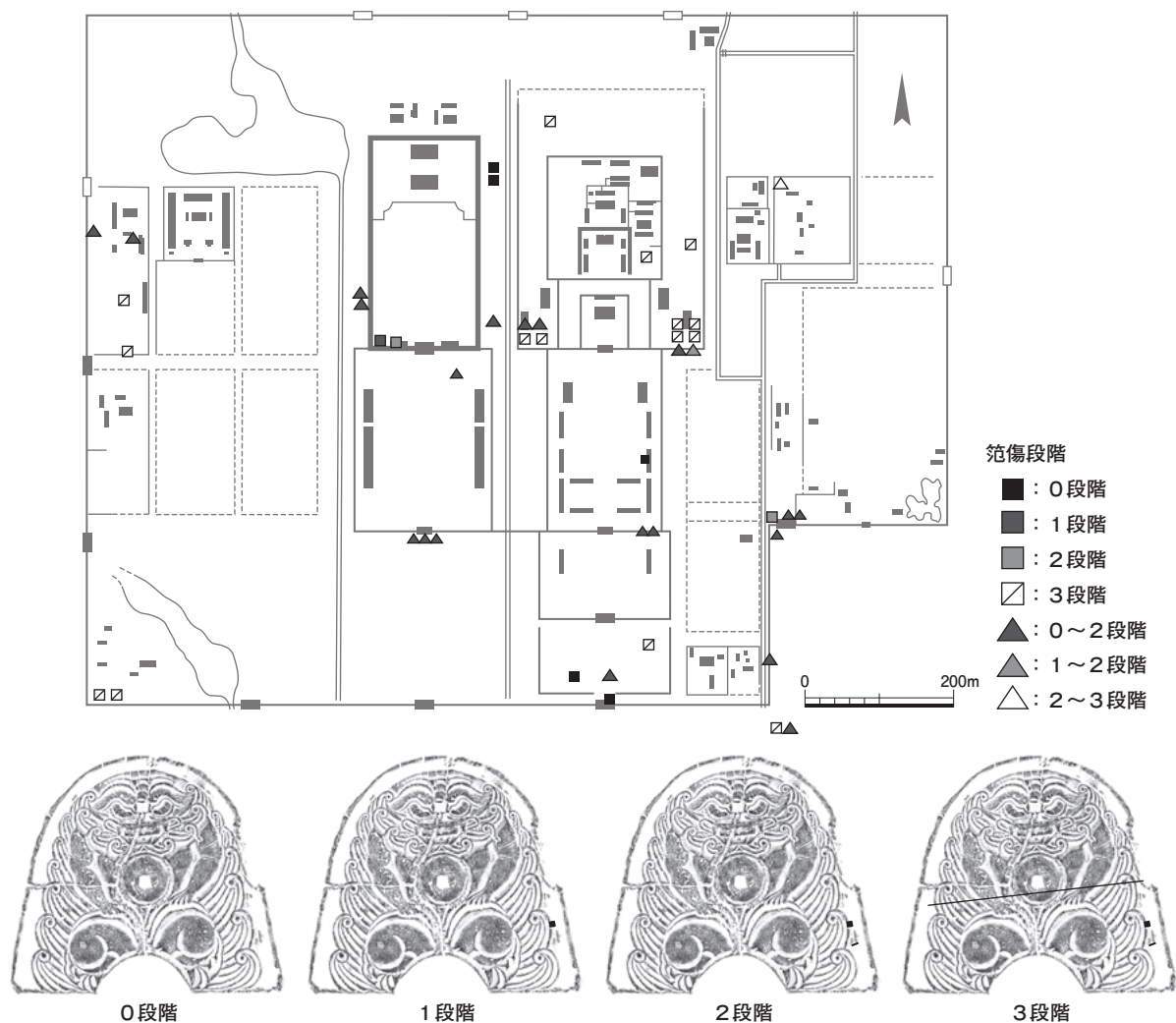


図2 鬼瓦I式Aの範傷進行ごとの平城宮内出土分布

表1 範傷進行の段階

範傷段階	範傷の位置
0段階	範傷なし
1段階	鬼左足側の下から2段目の卷毛と外縁をつなぐような幅広の傷が生じた段階
2段階	1段階の範傷下方に細い傷が生じた段階
3段階	文様面大きく横断する傷が生じた段階

で出土する傾向が看取される。これは、平城宮内でも早い段階で建物が造営された地区であることがわかる。同時に、鬼瓦I式A範傷0段階が出土する地区と一致する。

一方で、東西楼所用軒瓦は東区北方官衙（推定内膳司）地区や小子門周辺などに分布する。資料数が少なく断定することは難しいものの、こちらも鬼瓦の範傷段階毎の分布と照らし合わせると、鬼瓦I式Aの範傷1～2段階の出土分布と同様の傾向があるように見える。

軒瓦の平城宮内出土状況から想定される平城宮造営の順と鬼瓦の範傷進行がある程度一致する傾向を認めることができた。

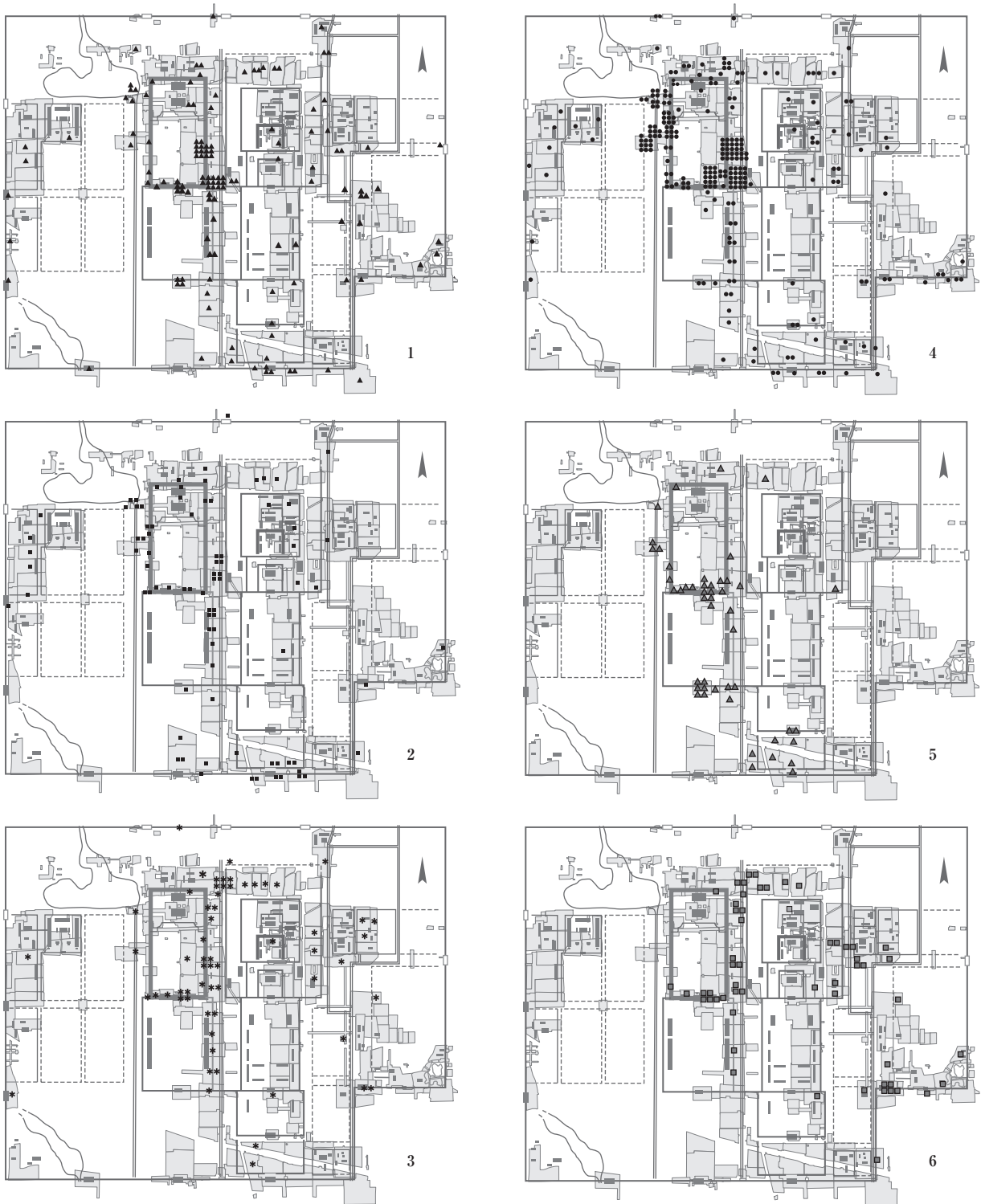
4 まとめ

第一次大極殿院出土の鬼瓦I式Aから、東西楼所用鬼

瓦I式Aは範傷0～2段階であることがわかった。さらに軒瓦の分布と鬼瓦I式Aの範傷進行との関係から、東西楼所用軒瓦が使用された地区では1～2段階の鬼瓦の出土がみられることがあきらかとなった。ここから、東西楼所用の鬼瓦I式は、範傷1または2段階のものの可能性が高いと推定することができる。（中川二美／東大寺）

註

- 1) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」『研究論集VI』奈文研、1980。
- 2) 平城京右京区城一坊（第125次調査区）でもこの範傷段階の鬼瓦が出土している。
- 3) 川畑純・石田由紀子・今井晃樹「中山瓦窯の調査—第523次」『紀要2015』。
- 4) 確認できた範傷とは別に、鬼文の右足側にも小さな範傷がみつめられる資料も存在するが、他の範傷との前後関



軒丸瓦（1：6284C▲ 2：6284A■ 3：6304C*）
 軒平瓦（4：6664C● 5：6668A▲ 6：6664K■）

0 400m
 ※印はそれぞれ出土破片資料1～5点を示す

図3 第一次大極殿院造営にかかわる軒瓦の平城宮内出土分布

係は不明である。このため今回の範傷進行段階には含めていない。

- 5) 今回接合することが判明した第28次と第337次調査区出土資料は、第337次調査区の方に出土位置を示した。
- 6) 3段階の資料が多数生産された可能性もあるが、範傷が大きいため傷の有無を確認しやすいことが影響している可能性もある。

7) 毛利光俊彦・花谷浩「第VI章 考察 1屋瓦」『平城報告 XIII』奈文研、1990。